

# ほっとほっとタイムズ—第8号—

2023.3.17

井荻小学校 校内委員会



最近、テレビを見ていると、日本という国のどこに世界の人々が価値を見ているのか、驚かされることがよくあります。最近では、ガチャガチャが若者の間でとても流行っていて、ガチャガチャ目当てに日本に来る若者もいると聞いてびっくりしましたが、もっとびっくりする言葉に出会いました。

皆さんは、「親ガチャ」という言葉をご存じでしょうか。若者の間では当たり前に使われている言葉だそうです。「うちの親は外れ」とか「あたり」とかいうように使うらしいです。親を、あってもなくてもいいようなガチャガチャと同等に扱っていることは衝撃です。子供にとって親ってそんな存在なののでしょうか。

先日、ある幼稚園を見学した時のこと。ゲームで負けた子が、今にも泣きだしそうです。すると担任の先生がさすが、「最後まで頑張っていて偉かったねえ。みんな、拍手！」と声をかけ、その子は立ち直りました。小さいときから不安感の大きいお子さんだったそうですが、ことあるたびに声をかけ、頑張ったこと認めることで、ずいぶん自信をつけてきたそうです。こうやって心は育つのです。その細やかな心遣いに感心するとともに、担任一人しかいない学校で(園では大人3人が見守っていました)、どこまでできるだろうと不安になりました。

また、次の園では、年長さんが元気いっぱい遊んでいるそばを、やっと歩いている1歳児が通りかかりました。この保育園では、朝7時台から夜7時45分まで預かるお子さんもいるそうです。「大変ですね。」という返事に「いとこどりさせてもらっています」とにこやかにおっしゃった後、「でも、それでも子どもは親が一番なんですよ。」とおっしゃっていました。そうなんです。子供は何があっても自分の親が一番なのです。

最近、家族間で悲しくなるような事件がたびたび起きます。なぜ、こんな事件が起きるのでしょうか。

他の動物と人間の育ちの違うところは、自分で判断して行動できる力を育てなければならないことではないでしょうか。正しい判断をするためには、つまり、一人前の人間になるためには、人の心がわかること、先の見通しがつくこと、自分の感情をコントロールすることなどが必要となります。「心を育てる」ということでしょうか。

では、心はどうすれば育つのでしょうか。それはあくまでその子の気持ちに寄り添い、一緒に悩み、考え、喜ぶことでしか育たないのではないのでしょうか。

わが子が1歳児の時、高熱のため脳のかかなりの部分、損傷を受け、立ち上がることもしゃべることもできなくなってしまった家族の映像を見ました。「1歳までより、障害を負ってからのほうがずっとずっとかわいい」とおっしゃっていました。「何かができるからかわいい」のではなく、その子のことを考え、手を尽くすからこそ「何ができなくてもかわいい」のがわが子なのでしょう。この気持ちを子供に何度も何度も伝えてほしいと思います。そのメッセージが届いていたら、自分の親に危害を加えるなどという悲しい事件は起きないのではないのでしょうか。

学校の場にいると、自分の良さが見つけられず、本気で自分はダメな奴だと思っているような子、自分が満たされない思いを抱いているつらさから、周りの友達も陥れようとしているように見える子など、悲しくなるような場面が時々見られます。さみしさのあまり、反抗することで教師の温かさに触れようとしているように思える子もいます。「大丈夫、みんないいところがしっかりあるよ」「大丈夫、だれでもがんばればできるようになるよ」といっぱい伝えてあげたくります。でも一。本当に子供が欲しがっているのは、私たちの声ではなく、親の声なのです。親を求めてくれるのはそんなに長い期間ではありません。中学校に入ると親より友達の影響のほうが大きくなる気がします。長い人生のほんの一部です(それでいて、親が自分にとってどうだったかは大人になっても年をとっても覚えていきますよね。そのくらい親の存在は大きいのです)。

年度末、子供が一番不安になるときです。ぜひ、子どもの気持ちにしっかりより沿ってやってほしいと願っています。

